第１５分科会に参加して

榛名まちづくりネット　　芹澤　優

この研修交流会に参加しようとした動機は、自分が住んでいる地域から時には離れてみないと良さや、足らないことなどが判らなくなってしまい、再度見つめなおすことの必要性に駆られたことと、こんな時代の中でも世のため、人のため、地域のため、自分のためにがんばっている人々の姿や地域の自然、生活の営みを見聞し、この研修会の内容をもって、わが地域の活動の参考にしたいという思いで参加した次第である。がんばっている地域の人々のエネルギーを少しでも、お裾分けしてもらい、また長年に亘っての地域活動の中で溜まった埃を落としたいということもあって参加したのである。最低、１年に１回ぐらいは郷土から離れ、外から見ることが必要なのである。

今回は愛媛県ということもあり、１１月１３日に出掛け、松山の道後温泉に寄ってみた。群馬の温泉地とは違ってリフレッシュできる雰囲気があり、そこで生きている人のやさしさと生きる力を感じ取ることが出来た。ちなみに、わがネットの活動のメインテーマ「竹久夢二の榛名山産業美術研究所構想」に基づいた活動を行なっているが道後温泉の街中にも「夢二のアトリエ」のお店があったのには驚き、この活動を続けていることは間違いないということを再認識することが出来たことは大変よかった。

翌１４日の１０時から南予文化会館で「きなはいや伊予の国～広げよう地域づくりの輪～」の大会テーマにより開会した。なかでもトークセッションがよかった！参加型のトーク形式を取り、地域づくりを行なう上での悩みや、これからの地域づくり活動のあり方等についてのやり取りができ、本音を出し合える内容であった。

分科会は１５分科会伊予市｛旧双海町｝「しずむ夕日が立ちどまる町」分科会に参加した。

旧双海町は、かつて過疎、高齢化、地盤沈下にも悩まされる何もない町であり、近くの松山市の名を借りて説明するしかなかった町であった。その様な中で「夕日」を唯一のテーマで地域を活性化させたのが元役場職員の若松進一氏であるからすごい！公務員がそこまでやり抜けるのはなぜか、またその経緯と活動内容をどうしても見聞したくて、この分科会を希望し、参加したのである。今、われわれの地域がそんなに遠くない時代に、そうなってしまうのではないかと危惧しているところなのでどうしても参考にしたかったのである。

その具体的な活動内容は「夕日」というコンセプトで地域活性化をめざしたのである。取材に来たＮＨＫのディレクターが夕日を見て「こんな美しい夕日は初めてだ」という言葉に教えてもらったとのことである。地域資源というものは、外部の人に見出され、気づかされるものである。最初は多くの住民の反対があったがやり抜いたという。大体この辺で公務員はやらなくなってしまうのである。行政は単年度予算であるし、為政者は４年間の任期であり、その間で業績を伸ばさなくてはならないので、反対の人数がどのくらいいるかによってその事業が遂行できるか、できないかが決まってしまうのが通常である。

地域活性化事業は無難な、常識的なことを行ったのではマスメディアも取り上げないし、地域住民の意識変革も出来ないし、知名度アップにも繋がらないのである。

双海町は最初の仕掛けとして「夕焼けコンサート」を夕日の沈む海辺の駅で開催してから、認められて行ったとのことである。

われわれも今から２５年前に「榛名で生の音楽を聴く会」を仕掛け、２０年前には歌謡名曲「湖畔の宿」のモデル地であり、「宵待ち草」で有名な竹久夢二がこよなく愛した榛名湖で食と芸術｛榛名アートウイーク｝を官主導で民と一緒に開催し、１０年間続けたのであるが担当が代わると継続しない、させないこととなってしまったのである。

この地域は、官主導では継続的な事業は出来ないことがわかったので民でこれを継承し、出来ることをやろうということで「地域づくり団体榛名まちづくりネット」で引き継ぎ、異業種のネットワークにより活動を展開しているのであるが・・・。

さて、愛媛の双海と群馬の榛名とでは何が、どこが違うのか？を思考しないわけにはいかなかった。歴史か？風土か？住民の意識か？支える母体か？行政形態か？

本当に考えさせられる交流研修会であったが、危機感があること・持っていることが活動を奮い立たせる一番の要因であると感じさせられた。

この研修会で得た貴重な糧を基に、わが地域の活性化のために現状を踏まえ、今後も弛みない努力を重ねて参りたい。